

越後の甗－6・7世紀を中心に－

春日真実

はじめに

(1) 目的

甗（形土器、以下では単に甗とする）に関する研究としては、5～9世紀の甗の地域性や変遷を全国的な視野で検討した杉井健の研究〔杉井1999〕があり、近隣では関東地方の出現期の甗を検討した坂野和信の研究〔坂野1991〕、群馬県下の甗について検討した外山政子の研究〔外山1987・1989〕などがある。

新潟県下では、古墳時代～古代の米の調理方法を明らかにし、8世紀に土製甗から木製甗¹⁾への変化を論じた坂井秀弥氏の論考〔坂井1988〕、「頸部有孔受口付甗形土器」の分布について検討した相田泰臣氏の研究〔相田2009〕などがある。しかし、新潟県下の6・7世紀の甗を包括的に扱った論考は現在のところ無い。本稿は甗を素材とし、主に把手の有無に着目し、6・7世紀の越後²⁾の地域性を検討することを目的とする。

(2) 方法

甗は年代の推定できる遺物が共伴した資料を中心に抽出した。県内の資料を網羅したものとはなっていないが、大まかな傾向は示せるものと考えている。年代・時期の表記は、土器編年の時期区分を用いる。古墳時代（中期～後期）については田嶋明人氏の土器編年〔田嶋1996〕、古代は筆者の土器編年〔春日1999〕を用い（第1表）、「古墳4様式Ⅱ期」・「古代Ⅰ期」のように表記する。土器の時期は、各報告書・報文の記述を参考にしたが、報告書と異なる場合もある。また古墳4様式の土器については、相田泰臣の研究〔相田2004〕を参考にした。また、遺構名・土器の番号はそれぞれの報告書等に一致する。

1 分類

分類は把手の有無、器形、底部等の形状、法量により細分する³⁾（第1図）。

把手の有無 **A類**：牛角状の把手があるもの、**B類**：把手の無いもの

器形 **1類**：頸部・底部付近が屈曲しないもの、**2類**：頸部が屈曲し胴部に張りがないもの、**3類**：頸部が屈曲し胴部に張りがあるもの、**4類**：底部付近が屈曲するもの、**5類**：逆円錐形のもの

底部の形状 単孔のものを**I類**、多孔のものを**II類**とし、棧木孔の有・無や位置や底部の形状により細分する。**I a類**：底部が筒抜けで棧木孔が無いもの、**I b類**：底部が筒抜けで下端付近に棧木孔があるもの、**I c類**：底部が筒抜けで頸部付近に棧木孔があるもの

本稿		年代など
古墳	3様式	I期
		TK216～TK23
	4様式	I期
		TK47
		II 1期 MT15～TK10 II 2期 TK43など
古代	I期	1 2 3
		飛鳥Ⅰ
	II期	1 2
		飛鳥Ⅳ
	III期	1 2
		神亀二～天平八年(725～736)頃
	IV期	1 2 3
		西暦775年頃
	V期	1 2
	VI期	1 2・3
		天安元～貞観五年(857～863)頃 元慶年間(877～885)頃

第1表 本稿で用いる時間軸



第1図 甗の分類

の、**I b c類**：底部が筒抜けで下端付近と頸部に栈木孔があるもの、**I d類**：頸部付近に栈木孔があり、栈木孔のU字型の突起があるもの（「頸部有孔受口付甕形土器」と呼称されるもの）、**I e類**：小孔を1つ持つもの（「有孔鉢」と呼称されるもの）、**II a類**：底部を切り抜き多孔とするもの、**II b類**：底部を橋状の粘土紐で区切り多孔とするもの、**II c類**：棒状工具で刺突し多孔とするもの（「多孔底土器」と呼称されるもの）。

大きさ：器高30 c m前後を**大型**、25～20 c m前後を**中型**、15 c m前後を**小型**とする。

分類の表記はA 1 I a 類（中型）のように表記する。全形のわからない資料はA I a 類、A類、II b 類のように表記する場合もある。

2 越後出土の甗

地域毎にどのような甗が出土しているか確認する。

（1）西頸城（第3図）

糸魚川市田伏遺跡は古墳3～4様式の土器が出土している〔関ほか1972〕。甗はB 1 I a 類（中型）のほかA類が確認できる。糸魚川市山岸遺跡S D2274は古墳4様式II期の土器が出土している〔春日ほか2012〕。甗はA類が確認できる。このほか図示しなかったが糸魚川市須沢角地遺跡では、古代III期の竪穴建物（S I 113）からからB 1 II c 類（多孔底土器）が出土している。

以上のように西頸城地域では甗の出土例が少ないが古墳4様式にはA類（把手を持つ甗）が一定量存在していた可能性が高い。

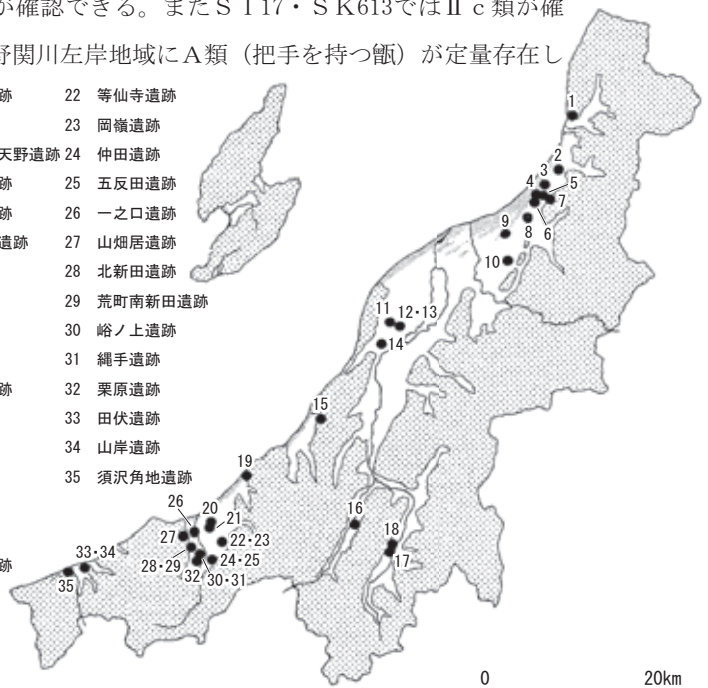
（2）高田平野関川左岸（第3～7図）

一之口遺跡は古墳時代前期から平安時代にかけて断続的に営まれた遺跡である〔鈴木ほか1994〕。S I 113・112からは古墳4様式II期の土器が出土している（第3図）。S I 113から出土した甗はA 1 I a 類・B 2 I a 類・B 1 I a 類が確認できる。S I 112からはA I a 類とB 3 I a 類が確認できる。S I 79・614・17・1400・107・104・18・137・625・1262・613は古代I期の土器が出土している（第3・4図）。S I 79・614・17・107・104・18、S K613ではA類が確認できる。またS I 17・S K613ではII c 類が確認できる。古墳4様式から古代I期にかけて高田平野関川左岸地域にA類（把手を持つ甗）が定量存在したことを示す資料と考える。

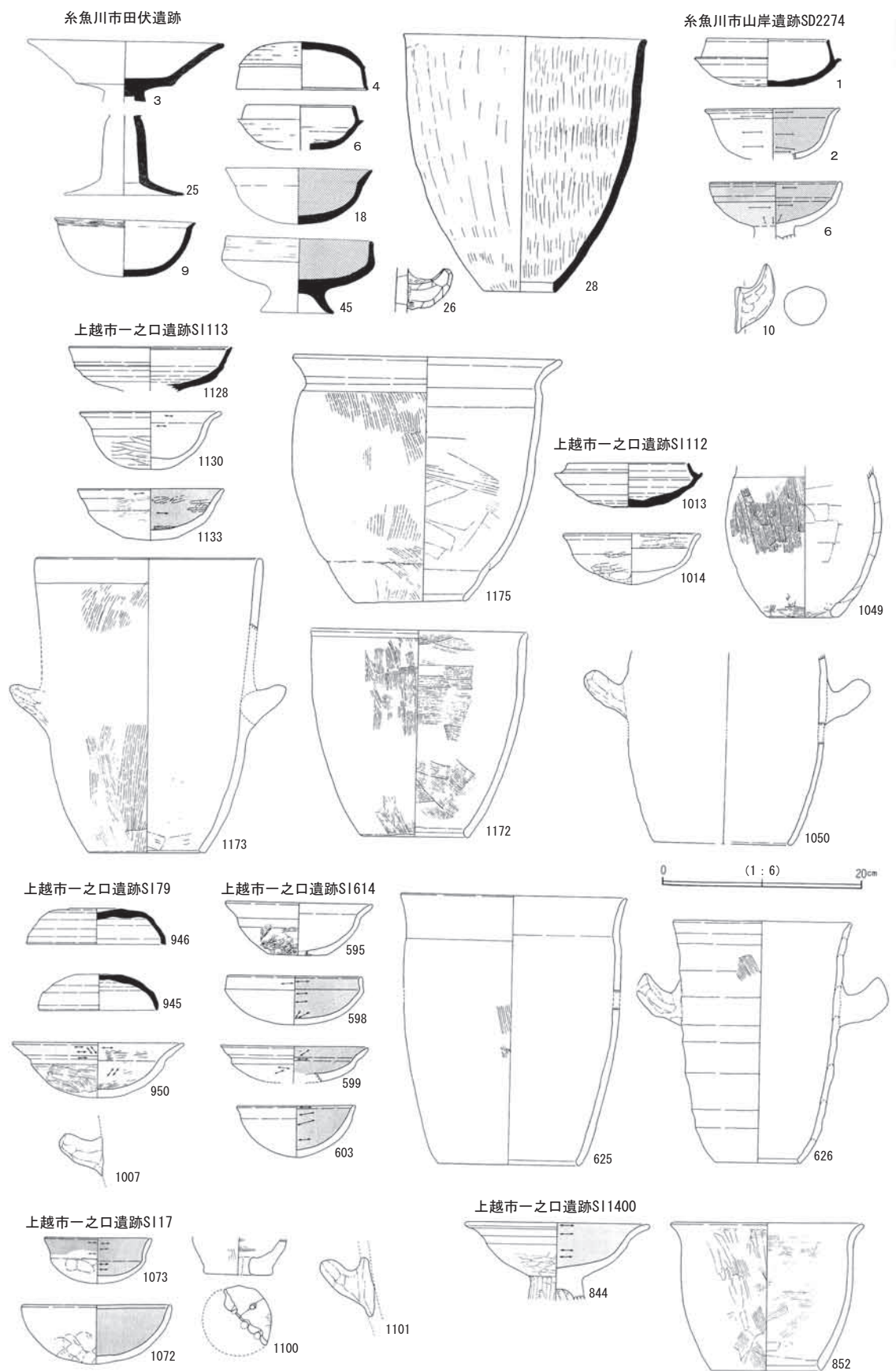
上越市山畑遺跡は弥生時代後期と古代I期の遺跡で、古代I期の竪穴建物が多数検出された〔小島1979・北野2003〕⁴⁾。1・4・14・20・23・25・29・30号住居は古代I期の土器が出土しており（第5図）、このうち4・14・25・29号住居からA類が確認できる。また20号住居からはB 1 II c 類が確認できる。

上越市北新田遺跡と市荒町南新田遺跡は近接して存在し、一連の遺跡である可能性が高い。古墳時代早期から

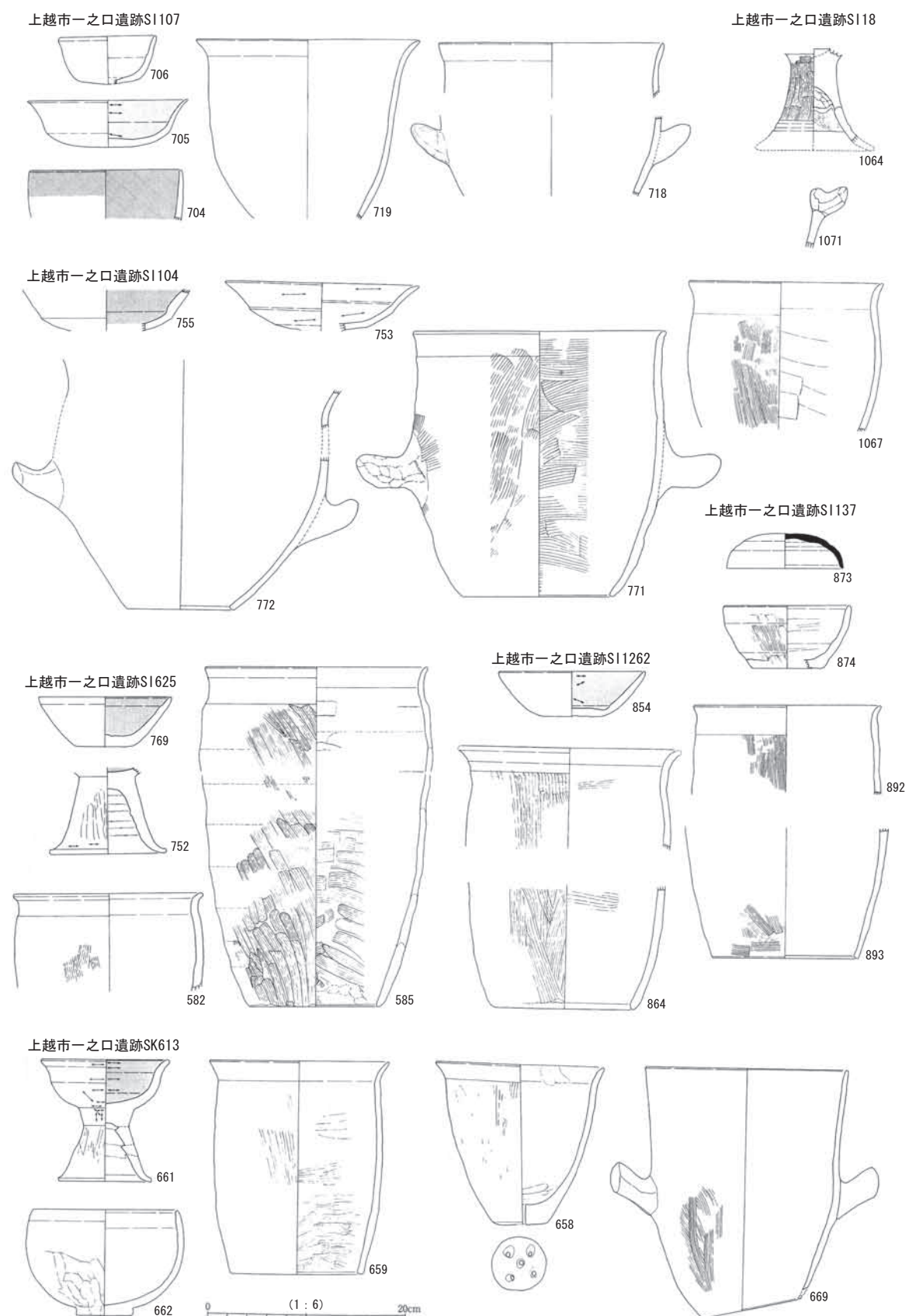
- | | |
|-------------|------------|
| 1 三角点下遺跡 | 22 等仙寺遺跡 |
| 2 道端遺跡 | 23 岡嶺遺跡 |
| 3 野付遺跡、天野遺跡 | 24 仲田遺跡 |
| 4 船戸川崎遺跡 | 25 五反田遺跡 |
| 5 船戸桜田遺跡 | 26 一之口遺跡 |
| 6 野中土手付遺跡 | 27 山畑居遺跡 |
| 7 貝屋窯跡 | 28 北新田遺跡 |
| 8 蛭取橋遺跡 | 29 荒町南新田遺跡 |
| 9 馬見坂遺跡 | 30 峯ノ上遺跡 |
| 10 腰廻遺跡 | 31 縄手遺跡 |
| 11 小諏訪前遺跡 | 32 栗原遺跡 |
| 12 大橋遺跡 | 33 田伏遺跡 |
| 13 三角田遺跡 | 34 山岸遺跡 |
| 14 五石遺跡 | 35 須沢角地遺跡 |
| 15 畠田遺跡 | |
| 16 馬場上遺跡 | 20 21 |
| 17 余川中道遺跡 | 22 23 |
| 18 金屋遺跡 | 24 25 |
| 19 木崎山遺跡 | 26 27 |
| 20 津倉田遺跡 | 28 29 |
| 21 延命寺遺跡 | 30 31 |
| | 32 33 |
| | 34 35 |



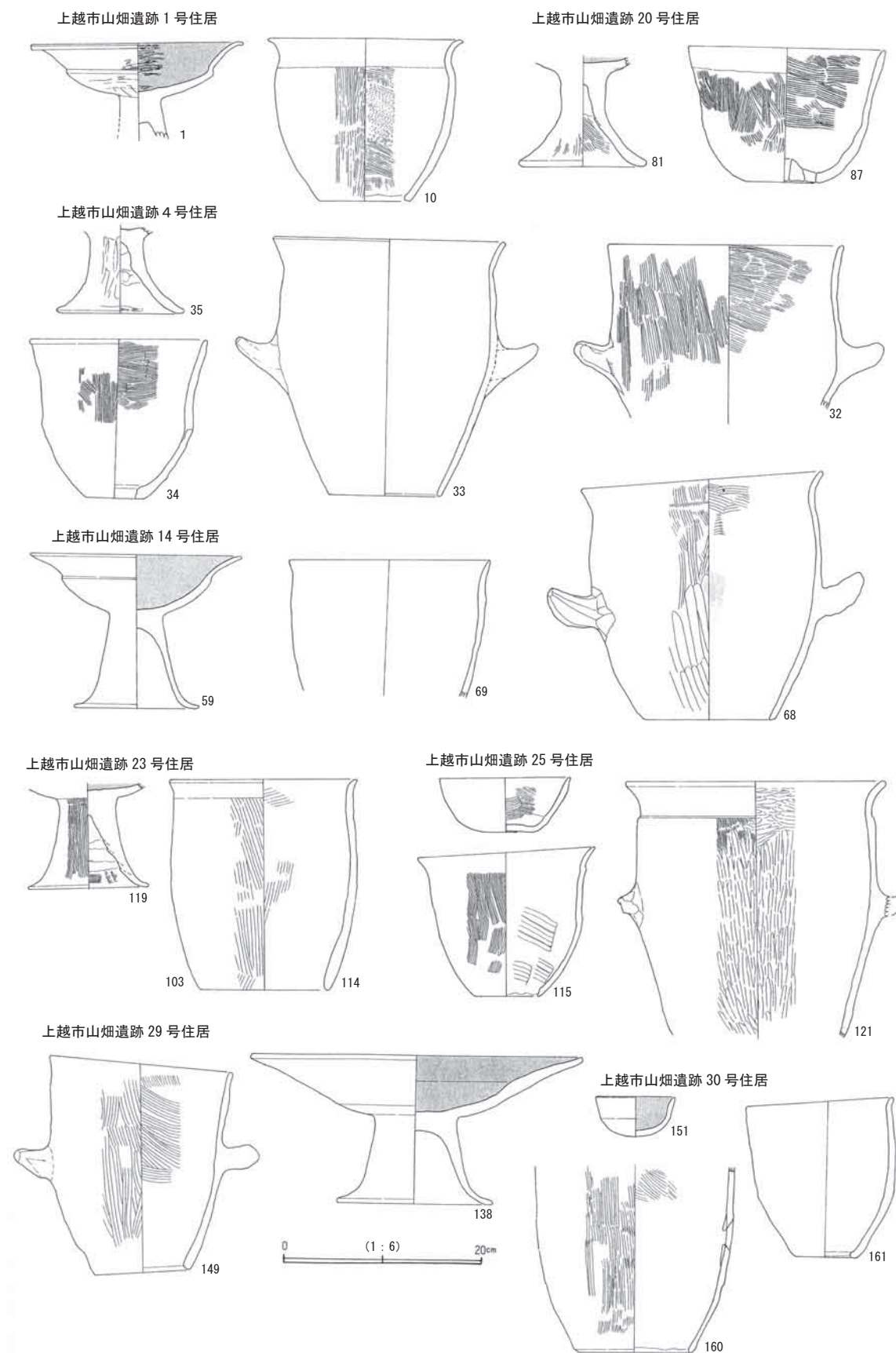
第2図 遺跡の位置



第3図 西頸城地域の土器・高田平野関川左岸地域の土器1 [関ほか1972、春日ほか2012、鈴木ほか1994]



第4図 高田平野関川左岸の土器2 [鈴木ほか1994]



第 5 図 高田平野関川左岸の土器 3 [北野2003]

中世にかけて断続的に営まれた集落跡である〔金内ほか2008・2010〕。北新田遺跡 S I 102・570は古代 I 期の土器が出土しており（第 6 図）、S I 102は B 2 I a 類・B 1 II c 類、S I 570は A 類・A I a 類・B 2 I a 類が確認できる。荒町南新田遺跡 S I 510・519・604・900・1305は古代 I 期の土器が出土している。いずれの遺構も A 1 類の甗が出土している。S I 510からは B 2 I a 類、S I 604からは B 1 I a 類と II c 類が出土している。

上越市峪ノ上遺跡 S I 1 は古代 I 期の土器が出土している〔渡邊ほか2005〕。中型・小型の A 1 I a 類が確認できる（第 7 図）。小型の 48 は報告書では片側だけに把手が付く甗の可能性が指摘されている。上越市山畑遺跡・北新田遺跡・荒町南新田遺跡・峪ノ上遺跡の資料は、古代 I 期に A 類（把手を持つ甗）と II c 類（多孔底土器）が定量存在したことを示す資料と考える。

妙高市栗原遺跡（12・13 次）S I 2 は古代 I 期の土器が出土しており〔佐藤2002〕、甗は A 2 I a 類が確認できる。栗原遺跡（4・5 次）S D 25 からは古代 III 期を中心とする時期の土器が出土している〔坂井1982〕。甗は A 類が確認できる。栗原遺跡（7・8 次）S D 131 からは古代 IV 期の土器が出土している〔高橋1984〕。甗は II a 類が確認できる。須恵質の甗である（第 7 図）。

上越市縄手遺跡 S K 86・198 は古代 II 期の土器が出土している〔笹澤2003〕。甗は S K 86 では B 1 I a 類、S K 198 では A 2 I a が確認できる（第 7 図）。栗原遺跡・縄手遺跡出土土器は、高田平野関川左岸地域では古代 II・III 期にも A 類（把手を持つ甗）が存在したことを示す資料と考える。

以上のように高田平野関川左岸地域では古墳 4 様式～古代 III 期にかけて A 類（把手を持つ甗）が定量存在し、古代 I 期には II c 類（多孔底土器）が確認できる。

（3）高田平野関川右岸（第 7～9 図）

上越市延命寺遺跡は古代 I 期と古代 III 期の集落跡である〔山崎ほか2008〕。S I 600、S B 010・012、S K 21 はいずれも古代 I 期の土器が出土している（第 7 図）。高田平野関川左岸の同時期の遺跡比べ甗の出土例が少ない。また甗は小型の B 1 類が多く、A 類は S B 012 から出土した把手が 1 点あるのみである。高田平野関川右岸地域では A 類（把手を持つ甗）が高田平野関川右岸地域ほど定着していなかったことを示す資料と考える。

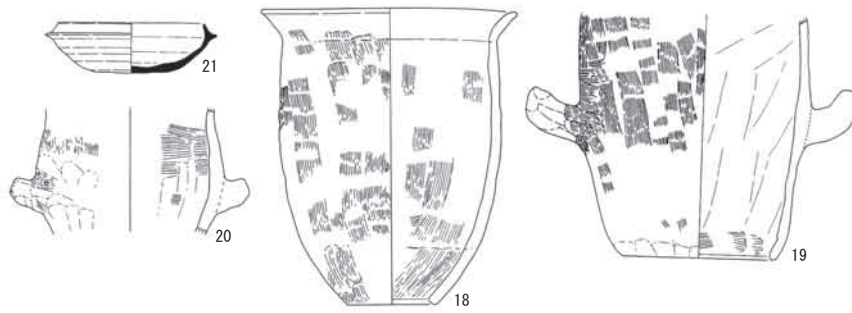
上越市岡嶺遺跡〔秦ほか1990〕と同市等仙寺遺跡〔秦ほか1999〕は近接して存在し、一連の遺跡である可能性が高い。岡嶺遺跡 1 号竪穴住居からは古代 II 期の土器が出土している。甗は A 1 I a 類と B 2 II c 類が確認できる（第 7 図）。等仙寺遺跡 2 号竪穴住居・4 号竪穴住居は古代 II 期の土器が出土している。甗は、2 号竪穴住居では A 2 I a 類・B 1 II c 類が確認でき、4 号竪穴住居では B 1 I a 類が確認できる。1 号竪穴住居からは古代 III 期の土器が出土している。甗は B 2 II c 類が確認できる（第 8 図）。

上越市津倉田遺跡は古代 II～IV 期を中心とする時期の集落跡である〔小島・笹澤1999〕。S I 1・53・80・113、S X 97 からは古代 II 期の土器が出土している。甗は S I 53 では大型の B 2 I a 類、S I 80・112 では A 類、S X 97 では小型の B 1 I a 類・II c 類が確認できる。S I 49・109、S K 403 からは古代 III 期の土器が出土している。甗は S I 49 では II c 類、S I 109・S K 403 では A 1 類が確認できる（第 8 図）。

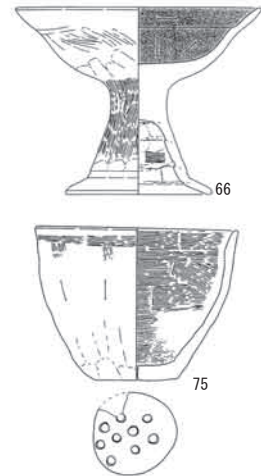
上越市仲田遺跡 S I 1038〔加藤ほか2003〕からは古代 II～III 期の土器が出土している。甗は A 1 I a 類と A 1 I b 類が確認できる（第 9 図）。

上越市五反田遺跡 S I 417〔渡邊2005〕からは古代 II～III 期の土器が出土している。甗は A 1 I a 類が確認できる（第 9 図）。上越市岡嶺遺跡・等仙寺遺跡・津倉田遺跡・仲田遺跡・五反田遺跡出土土器は、高田平野関川右岸地域では古代 I 期には定着していなかった A 類（把手を持つ甗）や II c 類（多孔底土器）

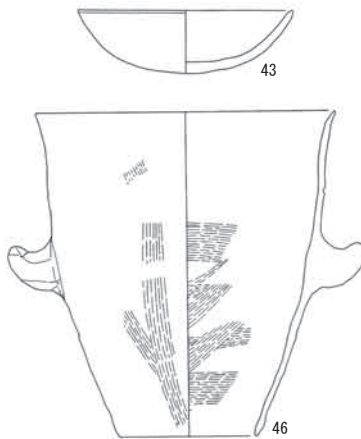
上越市北前田遺跡 S1570



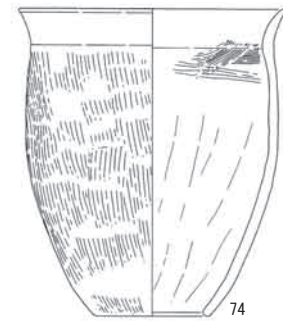
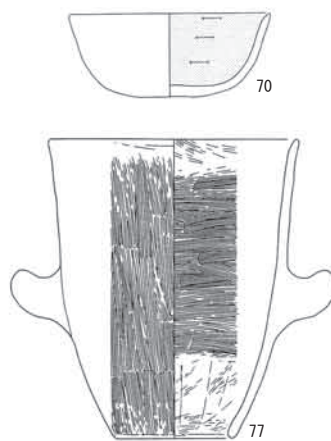
上越市北前田遺跡 S1102



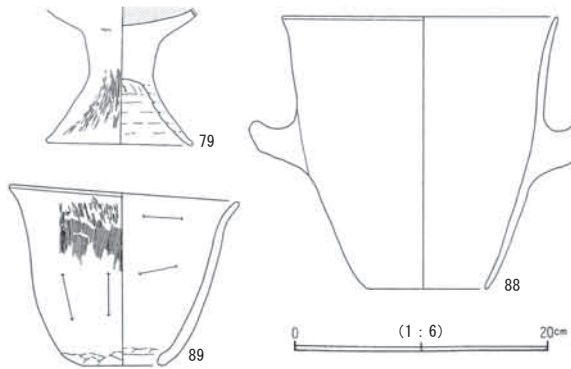
上越市荒町南新田遺跡 S1519



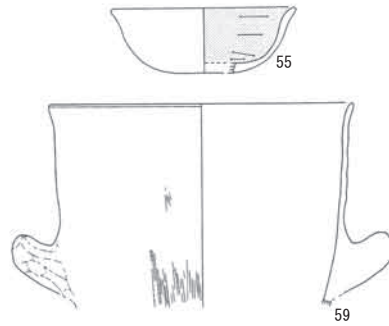
上越市荒町南新田遺跡 S1900



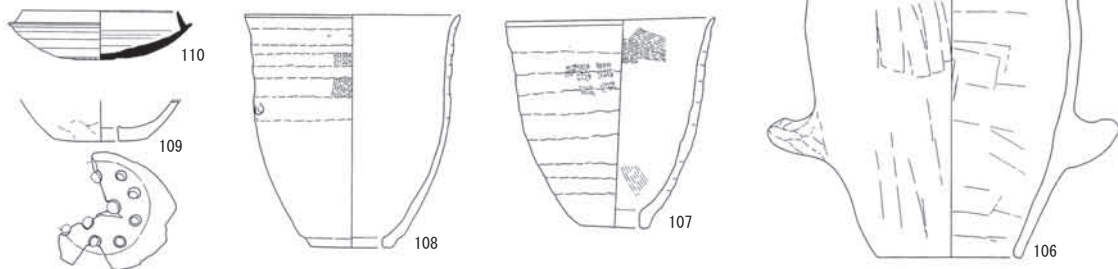
上越市荒町南新田遺跡 S1510



上越市荒町南新田遺跡 S11305



上越市荒町南新田遺跡 S1604

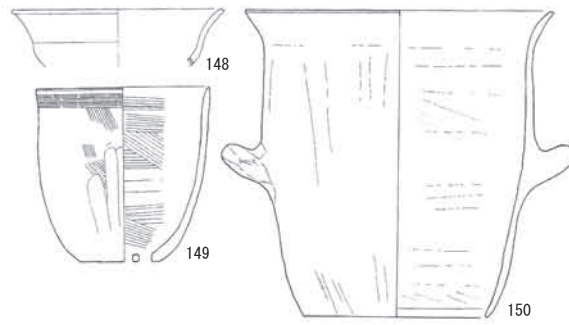


第6図 高田平野関川左岸の土器4 [金内ほか2008・2010]

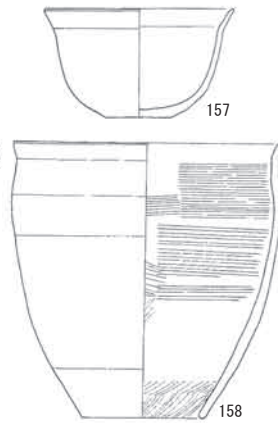


第 7 図 高田平野関川左岸の土器 5・高田平野関川右岸の土器 1
 [渡邊ほか2005、佐藤2002、笹澤2003、坂井1982、高橋1984、山崎ほか2008、秦ほか1990]

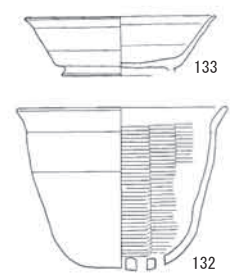
上越市等仙寺遺跡 2 号竪穴住居



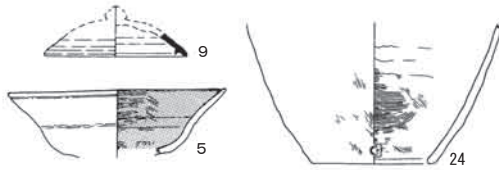
上越市等仙寺遺跡 4 号竪穴住居



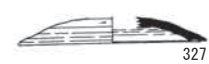
上越市等仙寺遺跡 1 号竪穴住居



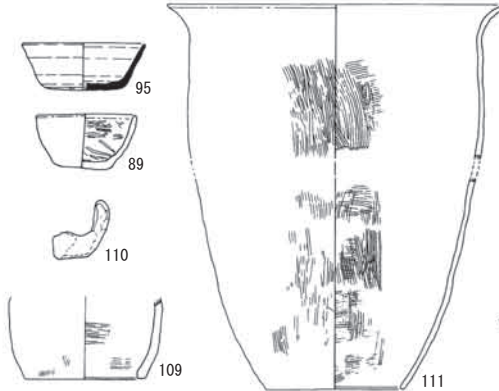
上越市津倉田遺跡 S11



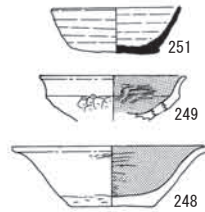
上越市津倉田遺跡 S1112



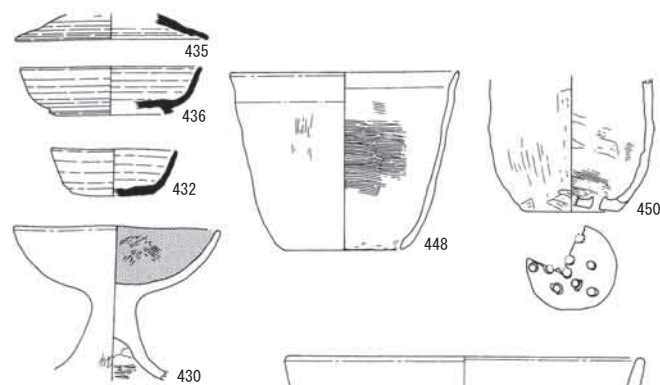
上越市津倉田遺跡 S153



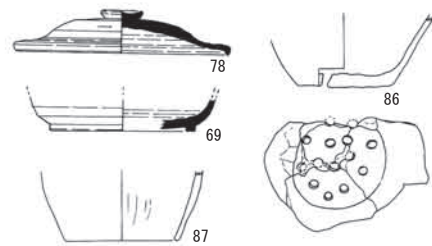
上越市津倉田遺跡 S180



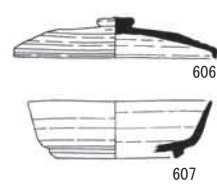
上越市津倉田遺跡 SX97



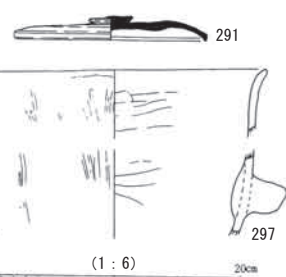
上越市津倉田遺跡 S149



上越市津倉田遺跡 SK403



上越市津倉田遺跡 S1109



第 8 図 高田平野関川右岸の土器 2 [秦ほか1999、小島・笹澤1999]

が古代Ⅱ期には定着し、大型の甗も増加したことを示す資料と考える。

上越市木崎山遺跡4号堅穴〔戸根・高橋ほか1992〕からは古代Ⅳ期の土器が出土している。甗はA2Ib類が確認できる。成形は口縁部ヨコナデ、胴部ハケメである（第9図）。須恵器技法を使用しない甗A類がⅣ期にも存在する場合があることを示す資料と考える。

以上のように高田平野関川右岸地域の甗は、古代Ⅰには小型のB類（把手無し甗）が主体を占めたが、古代Ⅱ期にA類（把手を持つ甗）が増加し、Ⅱc類（多孔底土器）も確認できるようになり、大型の甗も増加した。

（4）魚沼（第9図）

南魚沼市余川中道遺跡〔飯坂ほか2005〕は古墳3様式Ⅱ期を中心とする時期の遺跡であるが、古代Ⅰ～Ⅲ期の土器も定量出土している。SD124からはB5Ie類が2点出土している。他に共伴遺物が図示されていないが、古墳3様式Ⅱ期頃の可能性が高い。SK115からは古代Ⅱ期と考える高杯が出土している。甗はⅡc類が確認できる。

十日町市馬場上遺跡〔菅沼ほか2003〕は古墳3様式～古代Ⅴ期まで営まれた集落跡である。8号土坑からは古墳4様式Ⅱ期の土器と古代Ⅳ期の土器が混在している。報告書では古墳時代後期の遺構としている。甗はB3Ic類が確認できる。15・21号住居からは古代Ⅲ期の土器が出土している。甗は、ともに4I類が確認できる。包含層からはB5Ie類とA類が出土している。包含層からは古墳3様式Ⅱ期～古代Ⅴ期の遺物が出土している。

南魚沼市金屋遺跡〔山本1985〕は古墳時代前期から平安時代にかけて断続的に営まれた遺跡である。甗は包含層からA4I類が出土している。報告書では平安時代の遺物として報告されている。包含層からは古代Ⅴ～Ⅶ期の遺物が出土している。

以上のように魚沼地域は、古代Ⅲ期以降4I類が比較的多く確認できる点が特徴としてあげられるかもしれない。また、古墳4様式Ⅰ期（以前）にはB5Ie類が定量存在した可能性が高い。A類（把手を持つ甗）は古代Ⅰ期以前に遡る確実な例は未確認である。Ⅱc類（多孔底土器）は古代Ⅱに確認できる。

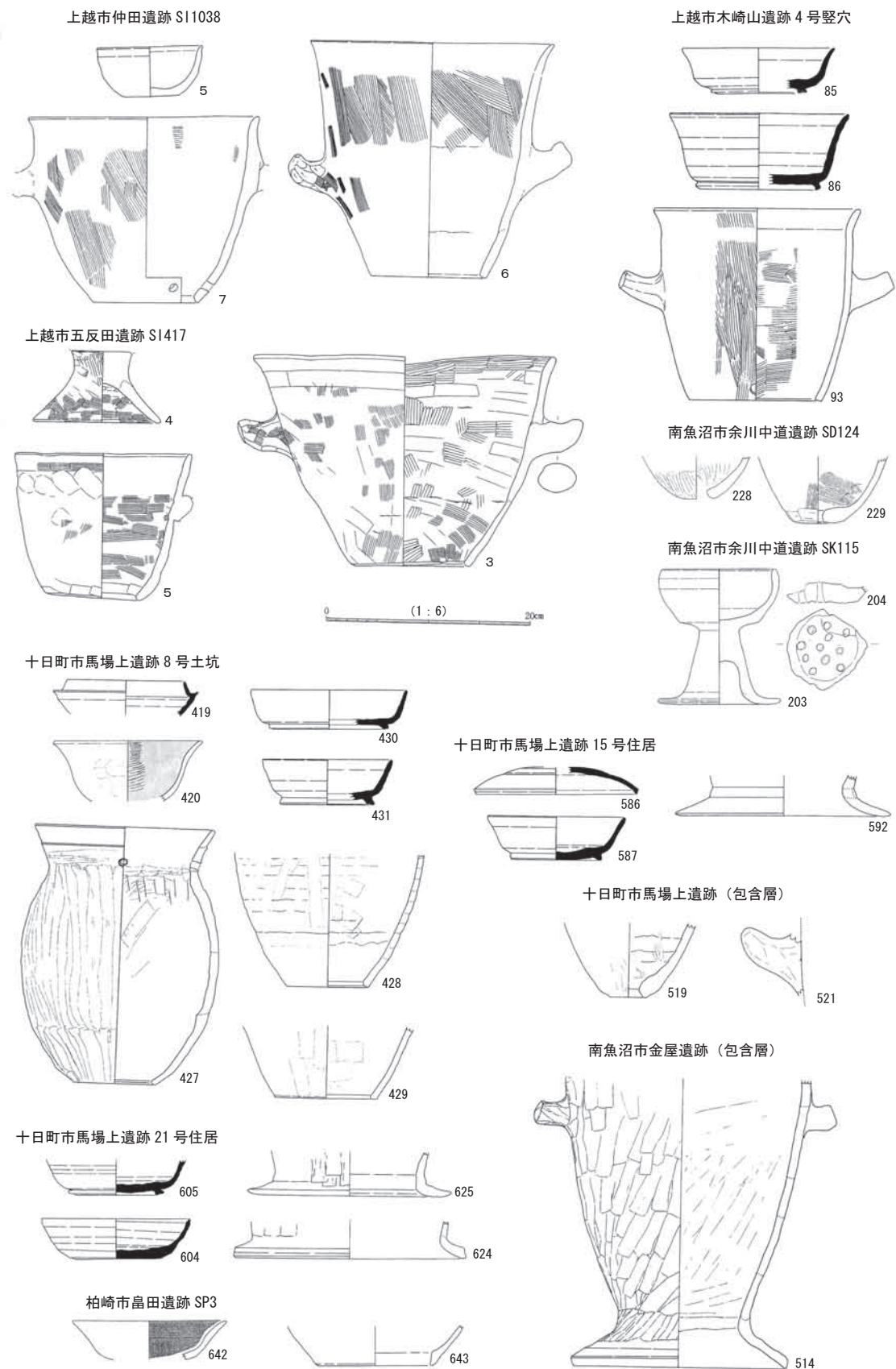
（5）柏崎平野（第9図）

柏崎平野の甗の出土例は少ない。柏崎市畠田遺跡SP3〔中島2001〕からは古墳4様式の土器出土しており、甗はI類が確認できる。

（6）新潟平野南部（第10図）

長岡市と燕市にまたがって存在する五千石遺跡は縄文時代から古墳時代にかけて断続的に営まれた遺跡であり、4区からは古墳時代後期の集落跡が検出された〔松島ほか2010〕。SB6（SD98）からは古墳4様式Ⅰ期の土器が出土しており、甗はB3Ibc類が確認できる。SD129・SB16（SD253）・SB3a（SD15）からは古墳4様式Ⅱ期の土器が出土しており、甗はB1Ie類・B5Ie類が確認できる。包含層からはB3Ia類・B3Ib類とB5Ie類が出土している。五千石遺跡4区出土土器は、新潟平野南部では、古墳4様式にはB3類やB5Ie類（有孔鉢形の甗）が甗の主体を占め、A類（把手を持つ甗）は定着していなかったことを示す資料と考える。

燕市大橋遺跡〔布施ほか2002〕と同市三角田遺跡〔松島2001〕は近接して存在し、一連の遺跡である可能性が高い。大橋遺跡は古代Ⅰ～Ⅲ期を中心とする時期の土器が出土しており、甗は小型のB1Ia類が確認できる。三角田遺跡上層は古代Ⅲ期の土器が出土しており、甗はⅡc類が確認できる。燕市小諏訪前遺跡〔布施ほか2006〕は古代Ⅲ期前後の土器が出土しており、甗は小型のB1Ia類・B2Ia類が確認



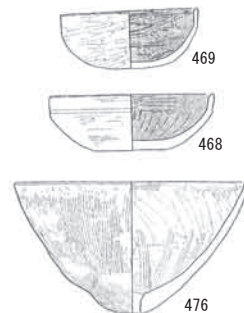
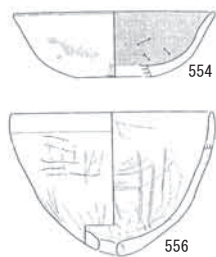
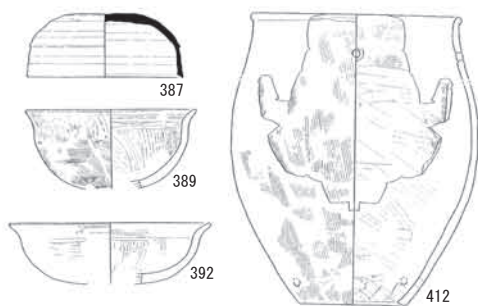
第9図 高田平野関川右岸の土器3・魚沼の土器・柏崎平野の土器

[加藤ほか2003、渡邊ほか2005、戸根・高橋ほか1992、飯坂ほか2005、菅沼ほか2003、山本ほか1985、中島ほか2001]

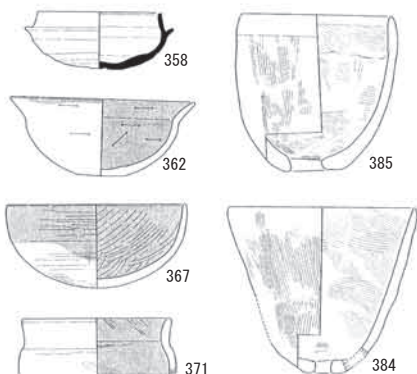
長岡市・燕市五千石遺跡 4 区 SB6 SD98

長岡市・燕市五千石遺跡 4 区 SD129

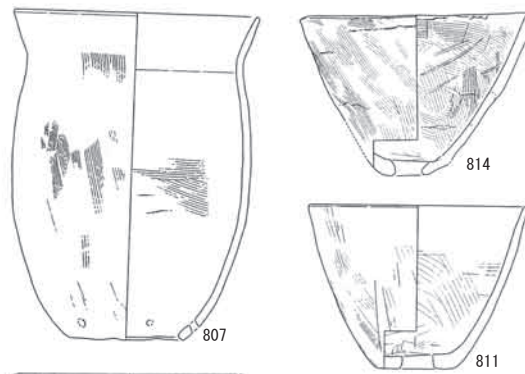
長岡市・燕市五千石遺跡 4 区 SB16 SD253



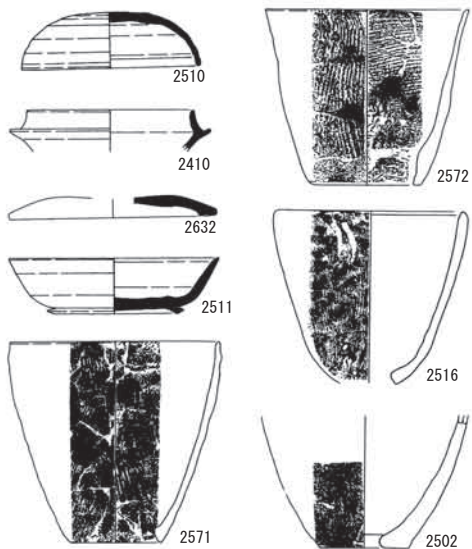
長岡市・燕市五千石遺跡 4 区 SB3a SD15



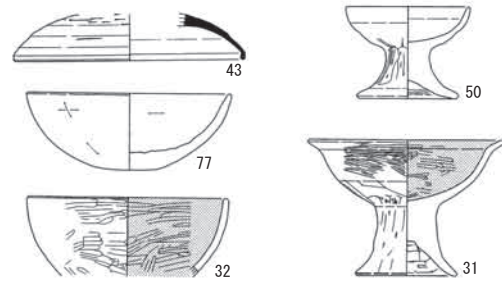
長岡市・燕市五千石遺跡 4 区 (包含層)



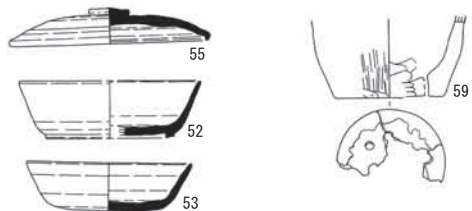
燕市大橋遺跡



燕市小諏訪前遺跡



燕市三角田遺跡上層



0 (1 : 6) 20cm

第10図 新潟平野南部の土器 [松島ほか2001・2010、布施ほか2002・2006]

できる。大橋遺跡・三角田遺跡・小諏訪前遺跡出土土器は、新潟平野南部では古代Ⅰ～Ⅲ期にもA類（把手を持つ甗）は定着していなかったことを示す資料と考える。

以上のように、新潟平野南部では古墳4様式にはⅠe類（有孔鉢形の甗）が定量確認できる。また古代Ⅰ～Ⅲ期は小型のB類（把手を持たない甗）が多く確認できる。A類（把手を持つ甗）は未確認であるが、Ⅱc類（多孔底土器）は古代Ⅲ期に確認できる⁵⁾。

（7）阿賀北（第11・12図）

新発田市蚤取橋遺跡〔鶴巻ほか2008〕は川跡5から古墳4様式Ⅱ期の土器が出土している。甗はB3Ⅰa類・B5Ⅰe類・Ⅰd類が確認できる。北区井戸13からは古墳4様式Ⅱ期の土器が出土しており、甗はⅠc類が確認できる（第11図）

胎内市天野遺跡128・643号遺構は古墳3様式Ⅱ期の土器が出土している（第11図）。甗はA1Ⅰa類が確認できる。胎内市野付遺跡4号遺構・船戸桜田遺跡74号遺構・野中土手付遺跡SD24は古墳4様式Ⅱ期の土器が出土している。甗はB2Ⅰa類・B3Ⅰa類・B1Ⅰa類が確認できる（第12図）。

村上市道端遺跡は弥生時代から古墳時代にかけて断続的に営まれた集落跡である。荒川町教育委員会（当時）と新潟県教育委員会が調査を行っている〔前川ほか2006・吉井2006〕。以下では新潟県教育委員会が調査を行った地点を報告書の書名から「道端遺跡V」、荒川町教育委員会が調査を行った地点を「道端遺跡（町）」とする。

道端遺跡（町）は古墳4様式Ⅱ期を中心とする時期の土器が出土しており、甗は3Ⅰc類・3Ⅰd類が確認できる。道端遺跡V SR2a・SX119は古墳4様式Ⅰ期～Ⅱ期の土器が出土している。甗はB1Ⅰe類・B5Ⅰe類が確認できる（第12図）。道端遺跡V・道端遺跡（町）ともにA類は確認できない。新発田市蚤取橋遺跡・野中土手付遺跡、胎内市野付遺跡・船戸川崎遺跡、村上市道端遺跡出土土器は、古墳4様式の阿賀北地域では、A類（把手を持つ甗）は定着しておらず、B類（把手を持たない甗）が一般的であったことを示す資料と考える。

新発田市馬見坂遺跡〔関2001〕は古代Ⅱ期の土器が出土しており、甗はA2類とB2Ⅱc類が確認できる（第11図）。阿賀野市腰廻遺跡〔川上2002〕は古墳時代早期～古代の遺跡である（第11図）。甗はA1Ⅰb類・A1Ⅰa類・Ⅰd類・B2Ⅰa類・Ⅱc類が確認できる。多様な時期の土器が出土しており、年代を限定することが難しいが、古代Ⅱ期の須恵器が定量出土している点に留意したい。村上市三角点下住居跡〔上原1962〕は古代Ⅱ期の土器が出土している〔春日2005a〕。高杯はA1Ⅰb類が確認できる（第12図）。新発田市馬見坂遺跡・阿賀野市腰廻遺跡・村上市三角点下遺跡出土土器は古代Ⅱ期にA類（把手を持つ甗）が阿賀北地域に定着したことを示す資料と考える。

胎内市船戸川崎遺跡〔水澤2002〕河川跡からは古代Ⅳ～Ⅵ期の土器が出土している。甗はA4Ⅱb類が確認でき（第12図）、古代Ⅴ期に伴うものと報告されている⁷⁾。

以上のように阿賀北地域では古墳3様式Ⅱ期にA類（把手を持つ甗）が確認できるが、以後定着せず、古墳4様式にはA類が確認できなくなる。しかし古代Ⅱ期にはA類が再度確認できるようになるとともに、Ⅱc類も確認できるようになった。

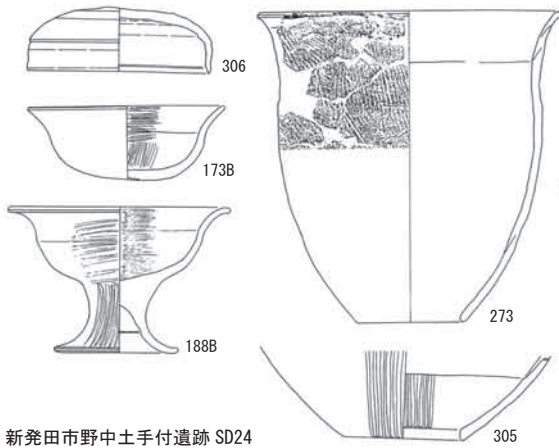
まとめ

古墳4様式～古代Ⅰ期の越後ではA類（把手を持つ甗）が定量存在する地域と、A類がほとんど存在しない地域があった。A類が定量存在する地域は西頸城と高田平野関川左岸地域で、A類がほとんど確認で

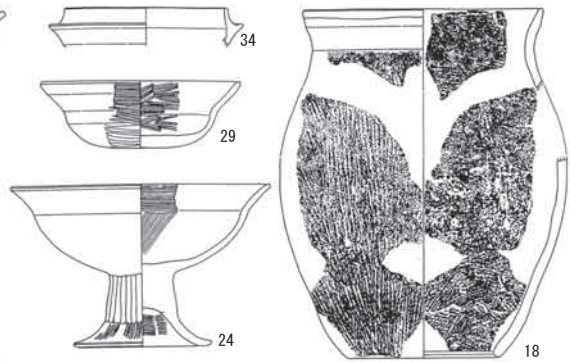


第11図 阿賀北の土器1 [関2001、川上2002、鶴巻ほか2008、水澤2009]

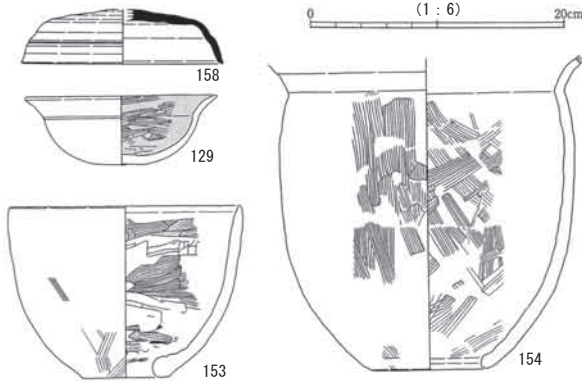
胎内市野付遺跡 4 号遺構



胎内市船戸桜田遺跡 74 号遺構



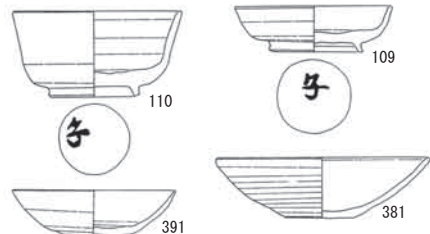
新発田市野中土手付遺跡 SD24



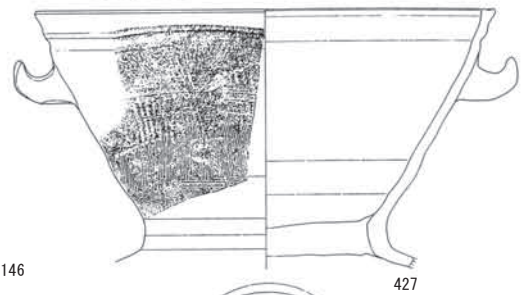
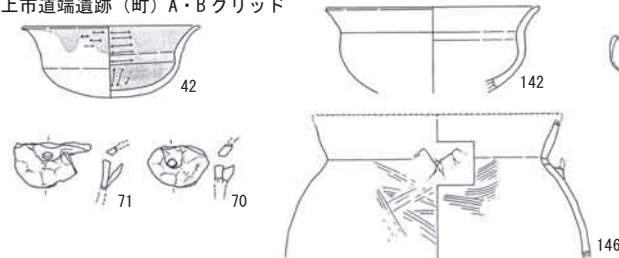
胎内市船戸桜田遺跡 (包含層)



胎内市船戸川崎遺跡河川跡 (2 段階)



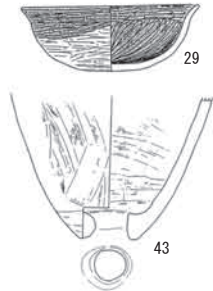
村上市道端遺跡 (町) E ~ I グリッド
村上市道端遺跡 (町) A・B グリッド



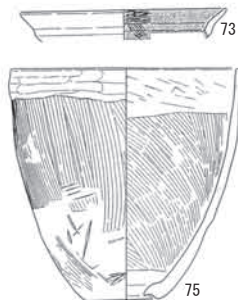
村上市道端遺跡 (町) C・D グリッド



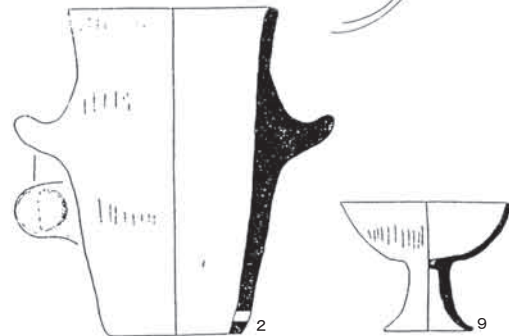
村上市道端遺跡 V SR2a



村上市道端遺跡 V SX119



村上市三角点下遺跡住居跡



第12図 阿賀北の土器 [水澤ほか2001、水澤2002・2007、佐藤2006、前川ほか2006、吉井2006、上原1962]

きない地域は、高田平野関川右岸・魚沼・柏崎平野・新潟平野南部・阿賀北などの地域であり、両者の境界は高田平野を縦断する関川付近であった。

この地域性に変化が現れるのは古代Ⅱ期（7世紀中葉～末）であり、A類の分布域が高田平野関川右岸・魚沼・阿賀北などの地域にも拡大する。これは、筆者が以前検討した円筒型土製品や側柱竪穴建物、甗Ⅱc類（多孔底土器）などの分布域の変化と同様であり〔春日2003a・b〕、同一の背景のものとで生じたものとする。具体的には淳足柵・磐舟柵造営や淳足柵・磐舟柵の後方支援の拡充を目的とした特定の集団の移住が行われた可能性が高いと考える。

本稿を、昨年8月にお亡くなりになられた甘粕 健先生に捧げます。

註

- 1) 本稿では佐渡を除く新潟県域の地域名称として「越後」の用語を用いる。
- 2) 坂井が木製甗の底とした孔を持つ円形板の中には蓋（の摘みを取り付けるための孔を持つ円形板）が含まれているように思う。
- 3) 甗は蒸し器であることから、分類は底部（蒸気孔）の形態を基本とすべきであるが〔杉井1999〕、本稿では越後の地域性を検討することを目的としており、把手の有無が地域性を表す要素と考え、これを分類の筆頭項目とした。
- 4) 土器の番号は北野2003に一致する。
- 5) 加茂市千刈遺跡〔中島ほか1974〕、長岡市土手下遺跡〔寺村ほか1999〕では甗B21a類が出土している。ともに土器は古墳4様式Ⅱ期を中心とする時期と考える。
- 6) このほか遺構外からⅡc類が出土している。遺跡からは古墳4様式の土器のほか、量はあまり多くないが古代Ⅱ期の土器も出土している。
- 7) このほか新発田市貝屋窯跡〔川上1982〕からA1類の甗が古代Ⅳ期の土器とともに出土している。

引用・参考文献

- 相田泰臣 2004「越後における古墳時代後期を中心とした土器の一樣相―頸城・魚沼地域の土師器を中心として―」『新潟考古』第15号 新潟県考古学会
- 相田泰臣 2009「古墳時代の角田山麓と阿賀北における土器の一樣相」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 飯坂盛泰ほか 2005『余川中道遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 上原甲子郎 1962「三角点下住居跡」『磐舟』新潟県文化財調査報告書第9号 新潟県教育委員会
- 春日真実 1999「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 春日真実 2003a「越後出土の円筒型土製品・板状土製品について」『蜃気楼』秋山進午先生古希記念論集刊行会
- 春日真実 2003b「越後における古代の多孔底土器について」『新潟考古』第14号 新潟県考古学会
- 春日真実 2005a「新潟県村上市三角点下住居跡出土土器について」『古代の越後と佐渡』小林昌二編 高志書院
- 春日真実 2005b「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について―「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に―」『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 春日真実 2006「越後における7世紀の土器編年」『新潟考古』第17号 新潟県考古学会
- 春日真実 2007「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第18号 新潟県考古学会
- 春日真実ほか 2012『山岸遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告第228集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査報告書
- 加藤 学ほか 2003『仲田遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告第128集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査報告書
- 金内 元ほか 2008『北新田遺跡Ⅰ・北前田遺跡Ⅰ』新潟県埋蔵文化財調査報告第197集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金内 元ほか 2010『荒町南新田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告第210集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川上貞雄 1982『貝屋須恵器窯址』加治川村文化財調査報告(1) 加治川村教育委員会
- 川上貞夫 2002『腰廻遺跡』笹神村文化財調査報告13 笹神村教育委員会
- 北野博司 2003「山畑遺跡」『上越市史』資料編二 考古 新潟県上越市
- 小島幸雄 1979『岩木地区遺跡群発掘調査報告書』上越市教育委員会

小島幸雄・笹澤正史 1999『津倉田遺跡』上越市教育委員会

坂井秀弥 1982『栗原遺跡－第4・5次発掘調査概報』新井市教育委員会・新潟県教委区委員会

坂井秀弥 1988「古代のごはんは蒸した「飯」であった－古代の米調理法復元メモ－」『新潟考古学談話会会報』第2号 新潟考古学談話会

笹澤正史 2003「縄手遺跡」『上越市史』資料編二 考古 新潟県上越市

佐藤 慎 2002『栗原遺跡－第12・13次発掘調査報告書』新井市教育委員会

佐藤友子ほか 2006『野中土手付遺跡・砂山中道下遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告第164集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

菅沼 亘・阿部恭平 2003『馬場上遺跡発掘調査報告書』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集 新潟県十日町市教育委員会

杉井 健 1999「甕形土器の地域性」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集』大阪大学考古学研究室

鈴木俊成ほか 1994『一之口遺跡東地区』新潟県埋蔵文化財調査報告第60集 新潟県教育委員会他

関 雅之・戸根与八郎 1972『田伏玉作遺跡』糸魚川市教育委員会

関 雅之 2001「新潟県新発田市馬見坂遺跡出土の土師器－阿賀北地域の七世紀代の土器様相とその意義－」『北越考古』第12号 北越考古学会

高橋 勉 1984『栗原遺跡－第7・8次発掘調査報告書』新井市教育委員会

田嶋明人 1996「北陸の5世紀初頭の土器（第4様式）」北陸の6～7世紀初頭の土器（第4様式）『日本土器辞典』大川 清・鈴木公雄・工楽善通編 雄山閣出版

鶴巻康志ほか 2008『蚤取橋遺跡・神明裏遺跡発掘調査報告書』新発田市埋蔵文化財調査報告第35 新発田市教育委員会

寺村光晴ほか 1999『土手上遺跡発掘調査報告書』寺泊町教育委員会

戸根与八郎・高橋 保ほか 1992『木崎山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告第28集 新潟県教育委員会

外山政子 1987「甕について－平安時代の甕を中心として」『研究紀要』4 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

外山政子 1989「群馬県地域の土師器甕について」『研究紀要』6 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

田嶋明人 1996「北陸地方の古墳時代の土器」『日本土器辞典』雄山閣出版

中島栄一ほか 1974『千刈遺跡調査略報』加茂市教育委員会

中島義人 2001『畠田遺跡』西山町文化財調査報告書第5集 西山町教育委員会

秦 繁治ほか 1990『岡嶺遺跡』清里村教育委員会

秦 繁治ほか 1999『等仙寺・梶木・山崎塚遺跡』清里村教育委員会

坂野和信 1991「和泉式の成立について－序論－」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会

布施智也ほか 2002『北小脇遺跡・天神堂遺跡・館屋敷遺跡・大橋遺跡』吉田町文化財調査報告書第9集 吉田町教育委員会ほか

布施智也ほか 2006『花立遺跡・小諏訪前遺跡』吉田町文化財調査報告書第13集 吉田町教育委員会ほか

前川雅夫ほか 2006『道端遺跡V』新潟県埋蔵文化財調査報告第165集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

松島悦子ほか 2001『三角田遺跡』燕市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 燕市教育委員会

松島悦子ほか 2010『五千石遺跡2区・4区西地区』燕市埋蔵文化財調査報告書第6集 燕市教育委員会

水澤幸一 2002『船戸川崎遺跡4次』中条町埋蔵文化財調査報告書第24集 中条町教育委員会

水澤幸一 2007『天野遺跡2次・野付遺跡2次』胎内市埋蔵文化財調査報告書第8集 胎内市教育委員会

水澤幸一 2009『天野遺跡3次・4次』胎内市埋蔵文化財調査報告書第16集 胎内市教育委員会

水澤幸一・吉村光彦 2001『船戸桜田遺跡二次』中条町埋蔵文化財調査報告書第22集 中条町教育委員会

山崎忠良ほか 2008『延命寺遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第201集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

山本 肇ほか 1985『金屋遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告第37 書新潟県教育委員会

吉井雅男 2006『道端遺跡』荒川町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 荒川町教育委員会

渡邊裕之ほか 2005『台の上遺跡・峪ノ上遺跡・五反田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告第138集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団